

1 はじめに

2020年はご多分に漏れず、附属天文台にとっても新型コロナウイルスの拡大による激変の一年でした。構成員の入れ替わりも多くありました。3月をもって2018年度まで15年間天文台長として附属天文台の発展に尽力された柴田一成教授が定年退職され、4月からは新たに太田耕司宇宙物理学教室教授が副天文台長に就任されました。感染症対策の厳しい行動制限の下、岡山天文台と飛騨天文台では、なんとか無事に観測がおこなわれました。

まず柴田一成教授におかれては、前年の第6回チャンドラセカール賞に続いて、2月に太陽分野では世界最高峰の賞とされるアメリカ天文学会太陽物理学分科会のヘール賞に選出されるという快挙を成し遂げられました。そして6月には国際天文学連合の『小惑星会報(MPC)』に、小惑星(19313) 'Shibatakazunari' の命名が公表される、というおまけつきです。新型コロナウイルスの第一波が高まりつつある3月27日、理学部6号館の大教室において、人数を半分に制限した部屋が満席になる聴衆を集め、最終講義がおこなわれました。祝賀パーティーは残念ながら延期せざるをえず、今も開催の目処が立たない状況が続いています。

附属天文台の運用体制についてひとつ大きな変化は、副天文台長の設置です。岡山天文台の設立に伴って附属天文台はその研究分野が大きく広がり、関連する国内機関との渉外事項も格段に増えたことで、一人の台長（私）がその全体を把握することが難しくなったことによるものです。実際、岡山天文台の運用は、宇宙物理学教室教員の力に大きく依存しているのが実状でした。このような状況から、附属天文台の円滑な運営と宇宙物理学教室との連携強化のため、台長を補佐する副台長の設置を理学研究科に申し出て承認されたものです。そして、4月1日から、太田耕司教授にその任を担ってもらうことになりました。主に岡山天文台の運用を（これまでと同様に）担当していただいています。尚、副天文台長を設置するには、天文台の規程を改訂するよう研究科から言われたのですが、そのようなものが存在しないことが発覚し、急遽「附属天文台規程」（ついでに「天文台利用規則」と「附属天文台推薦教員候補者選出手続」）なる文書を創立91年目にして作成した次第です。

新型コロナウイルスの拡大は、天文台の運営にも大きな打撃を与えました。まず花山天文台では、花山宇宙文化財団と協力して4月から毎週土曜日曜を市民に公開するべく、前年から計画を練ってきたところでしたが、これを始めることができません。感染症収束後の公開開始をめざして、感染防止対策や、階段手摺り、フェンス、案内看板などの設置といった準備を地道に進めることになりました。このような中、NPO花山星空ネットワークは、6月21日の部分日食を花山天文台からオンライン中継し、市民に天文学を発信する新たな方法を開始しました。これを皮ぎりに、8月には木星のオンライン観望会を開催、続いて、10月には京都市立芸術大学の磯部洋明さんや田中ゆりさんの協力の下、本館前の広場で太陽光に色づく蝶が舞うアート作品を「特別公開・宇宙と文化の日」として、11月には桂福丸さんご出演のオンライン落語会を花山天文台から配信しました。毎年音楽家喜多郎さんのご厚意でおこなってきた野外コンサートも、今回はこれまでを振り返るビデオ配信です。

4月になって県をまたぐ往来が制限されたため、飛騨天文台ではこれまで日常の観測を支援していた研究員や学生が京都から来ることができず、少ない現地職員のみによる運用を余儀なくされました。また、毎年おこなっている観測実習や卒業研究の観測、見学会はすべて中止になりました。太陽にはときどき黒点が出現し、新しい活動周期の兆しが見え始めています。

岡山天文台も外部からの来台を強く制限され、運用の継続が一時危惧されましたが、せいめい望遠

鏡においては、リモート観測のためのシステムを急遽立ち上げるという副作用もありました。このような状況下において、6月には、せいめい望遠鏡の観測装置2番手である多色撮像装置（TriCCS）を装置ローテータに装着してファーストライトを迎え、期待通りの星像が得られました。その後調整もさらに進み、秋には装置ローテータに観測装置を搭載した観測が本格化しました。12月には、TriCCSによる、はやぶさ2が宇宙でカプセルを分離する様子の撮像にも成功しました。2020年は1年目に比べて望遠鏡のトラブルもずっと減り、全国共同利用と京大時間を含めて、延べ64件（240夜）の観測がほぼ順調におこなわれました。

大変残念なこともありました。ペルーの電波天文学者であり、附属天文台が海外の大学と協力して推進するCHAINプロジェクトの要であったイシツカ・ホセさんが、事故の後1年の闘病生活の末、11月16日に逝去されました。CHAINプロジェクトにとっては計り知れない痛手となりましたが、ホセさんそしてペルーで太陽観測の礎を築かれたお父様の故石塚睦先生のご意思を胸に、今後もペルーとの強力関係を大切に育てていきたいとおもいます。心よりご冥福をお祈りします。

秋も深まる頃、コロナウイルス感染症の第三波が猛威を振るうようになり、2020年は厳しい活動制限の中で暮れることになりました。

2020年の附属天文台構成員の移動は以下の通りです。3月に定年退職された柴田一成教授の他に、飛騨天文台では、格和純教務補佐員が2019年12月末、大辻賢一研究員と松葉宏尚労務補佐員が3月、そして26年間飛騨天文台に勤務された門田美和子研究支援推進員が4月、21年間食事を作ってくれた井上理恵労務補佐員が5月をもって退職されました。そして門田さんの後任には佐野和典さんが4月に、大辻さんの後任としてペルーから留学し、この春京大で学位を取得したデニス・カベサスさんが5月に、井上さんの後任として和仁直代さんが7月に飛騨天文台に着任されました。また、岡山天文台関係では、事務を担当していただいた岡本恵理さんが10月に退職され、研究員の有松亘さんが2021年1月より白眉センターの特定助教に就任されました。退職された方には送別会もできないまま今日に至っているのが心苦しい限りですが、ここに長年の労をねぎらい、感謝を申し上げます。2020年12月時点で附属天文台の構成員は、常勤教員5人、常勤技術職員2人、特定教員4人、研究員5人、非常勤職員12人（内事務職員3人）、その他連携・協力教員7人と大学院生14人を合わせ、総勢49人となります。

最後に、柴田一成前会長には長年にわたるご功績に心から敬意を表するとともに、附属天文台をここまで発展させられたことへの感謝を申し上げます。

令和3年(2021年) 1月25日
京都大学大学院理学研究科
附属天文台
台長 一本潔